

相川の歴史

相川は、佐渡が島の北西に位置し、約40kmの自然豊かな海岸線を有する、風光明媚な土地である。

新潟県の観光の奥座敷として君臨し、佐渡を代表する観光地である。

さて、相川を一大都市にした「佐渡金山」を語らずには、相川の説明はできない。京都・大阪・江戸・相川。こうして地名を並べてみると、いかにも相川の名が違和感を与えるのは否めない。

日本を代表する三つの都市と並んで、なぜ相川が？という疑問は当然のことである。

ここにあげたのは、江戸時代初期の、日本で人口が多かった町の地名である。今では信じがたいことではあるが、かつての相川は国内有数の人口を抱える、一大鉱山都市であった。

その理由はもちろん、金山の存在にある。

今から約四百年前に金鉱脈が発見された佐渡金山は、天領として栄え徳川幕府の財政を支える。採掘が進むとそれにともない多くの人々が海峡をわたってきた。金の採掘を指示したのは徳川家康で、命を受けた大久保長安は、当時としては最高の測量・掘削・排水など土木技術を駆使し、産出にはげんだ。

その後、幾度か枯渇等が叫ばれたが、その都度新鉱脈の発見などで採掘は進み、明治時代に入ると政府直轄で西洋の技術を導入し、近代化による増産により国の財政を支えた。

明治の後期には、三菱合資会社に払い下げとなり運営は継続された。

第2次世界大戦が始まる昭和16年には、時の政府は佐渡金山の採掘に全力をそそぎ産出した金は、日本経済の一翼をになった。

平成元年、鉱山としての役割をおえた佐渡金山は、今観光施設として生まれ変わり、多くの観光客を迎え入れている。

現在、江戸時代から昭和まで約四百年の歴史を刻んだ遺跡群を世界遺産に登録すべく申請中である。

このように、相川を語るとき佐渡金山の歴史を抜きにしては話せない。

相川を訪れる皆さんには、相川の歴史にふれ、自然を満喫し、相川の住民とのふれあいを楽しんでいただきたい。

